古墳時代後期の朝鮮半島系冑(2)

うちゃま としゅき

- I 前稿以後の研究と今回の作業
- IV 渕の上1号墳出土突起付冑の再調査
- Ⅱ 伝昌寧出土冠帽付冑の観察
- V 論議
- Ⅲ 伝連山里出土鉄製冠帽の観察

日本にもたらされた朝鮮半島系の突起付冑と、その祖型である韓国出土の冠帽付冑を観察・検討する。

- 1) 伝昌寧出土の鉄地金銅張冠帽付冑は冠帽を冑に綴じて固定し、伝連山里出土例は総鉄製である。軍事的職能と政治的身分が強く関連して冠帽付冑を生み、一体化して鉄製突起付冑になるという理解を補強する。
- 2) 6世紀代の朝鮮半島系冑に2系統がある(頂辺板を地板の上に重ねる鋲留冑と、地板の下に重ねる革 綴冑)。群馬県綿貫観音山古墳例は前者、福島県渕の上1号墳例は後者である。

I 前稿以後の研究と今回の作業

日本列島の後期古墳から出土する突起付冑(第4図6・9)が、三国時代の伽耶地域で着用者の身分を表示した冠帽付冑(第4図8)の系譜上にあることを前稿で論じた(内山1992)。 今回の作業は、上記の「要旨」に挙げた2点である。

前稿以後の研究・報告を簡単に列挙しておく。

日本では次の各古墳でも朝鮮半島系冑の例が知られるようになった。熊本県楢崎山5号墳(清水・高橋1998)・山梨県茶塚古墳(小林他1979,末木他1994)・京都府八幡大塚古墳(京大博1997)・奈良県円照寺墓山1号墳(京大博1997,p.101)で古墳時代中期の縦長板革綴冑が指摘された。茶塚例は伏鉢部分も出土している。後期では、滋賀県宮山1号墳(樋口他1993)に無伏鉢縦長板革綴冑または冠帽付冑がある。また、後期中葉の埼玉県埼玉将軍山古墳の用途不明鉄器(第3図15、岡本編1997)は、冠帽付冑の頂辺板――「中折帽形鉄器」と呼ばれる――に類似する⁽¹⁾。

朝鮮半島における冠帽付冑(冠帽形伏鉢冑)の系譜は、日本列島に搬入された朝鮮半島系冑の故地を探る手がかりでもある。冠帽付冑の系譜については、大伽耶型(朴天秀1998, p.87)・百済系(申敬澈1989, p.61; 同2000, pp.332-334; 宋桂鉉1995, p.14)・全羅道と慶尚道の共通出自(曺永鉉1995, p.24)・高句麗系(趙榮濟他1990, p.219; 趙榮濟1995, p.20; 金

斗詰1991, p.76) と考えるそれぞれの意見がある。これまで知られていた大伽耶の慶尚南道陝 川地域(玉田M3号墳・磻溪堤가A号墳)以外からも次のような冠帽付冑と関連資料が報告されている。

〔百済地域〕「伝扶余出土」とされる韓南大学校所蔵の金銅装方形板革綴冑が紹介された (国立中央博物館1999)。これも冠帽付冑と考えられる。

[伽耶地域東部] 洛東江以東の慶尚南道昌寧校洞 3 号墳の「鉄製冠帽」(第 3 図14)が冑に付属する可能性が高い(沈奉謹他1992, p. 261)。伝連山里出土鉄製冠帽(第 1 図 2)や伝昌寧出土冠帽付冑(第 1 図 1)も、出土伝承地は洛東江以東である。

[高句麗地域] ソウル市・九里市峨嵯山第4堡壘出土冑(第4図3,崔鍾澤2000, pp.111-112) や、集安三室塚(國立晋州博1987, p.242; 宋桂鉉1995, p.14) と通溝12号墓(宋桂鉉2000, pp.342-343) の武人壁画の伏鉢付冑が、冠帽付冑と同種の方形板革綴または小札革綴であることが指摘された。

Ⅱ 伝昌寧出土冠帽付冑の観察(第1図1)

小倉コレクションの伝韓国慶尚南道昌寧出土品(東京国立博物館1982)が、鉄地金銅張冠帽を冑の頂辺板に綴じ付けた遺物であることを確認した。

これは冠帽付冑(頂部に冠帽形の装飾を持つ冑)の冠帽部分である。梅原考古資料(穴沢・馬目1975, pp.13-14)の実測図縮尺と計測値(長径22×短径18×高15.2cm)は誤りで、実物はずっと小さい。次項で説明する伝連山里例(第1図2)とともに冑の本体としては小さすぎるので、前稿(内山1992)で考えた「冠帽形冑」(全体を冠帽形に作る冑)ではない。前稿で示した朝鮮半島系冑の分類案から「冠帽形冑」を削除する。伝昌寧例の大きさは、現存部で長径12.0×短径9.5×高8.7cm; 冠帽部で長径10.7×短径8.4×高6.9cmである。

頂辺板(中折帽形製品)と冠帽部は鉄地金銅張製(鉄板厚さ2 mm、金銅張板は厚さ0.2 mm程度)。冠帽部は金銅板を被せた左右各1枚の鉄板の合わせ目に、0.4 mm厚程度の金銅製覆輪を付ける。左右板に比べて覆輪が薄く、覆輪が左右板を挟み込まない弱い作りだが、冠帽部の2孔1組×6箇所の綴孔に紐を通して頂辺板に冠帽部を固定するので、全体は丈夫になる。冠帽の覆輪部正面の2孔の内面には横方向の綴紐痕跡(革紐?)が残る。

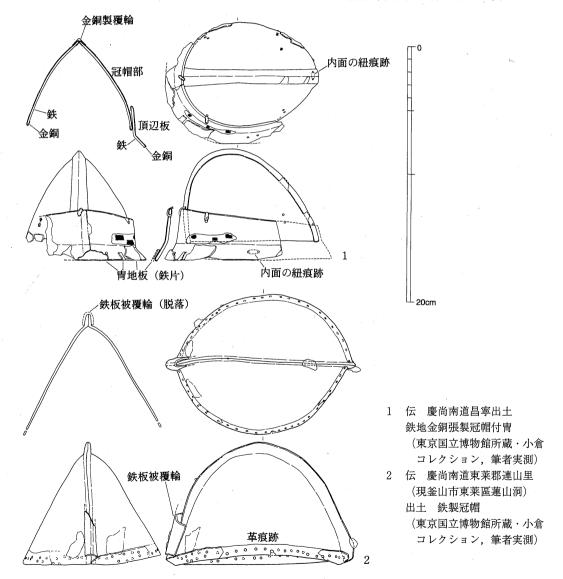
頂辺板は鉄板を輪状に巻いた後に金銅板を被せる。頂辺板と金銅被板はどちらも背面側で右上重ねに合わせる。冠帽部の綴孔と対応する6箇所の綴孔を上縁から4~6㎜のところにあける。高橋分類(1995, p.140)の「綴第1技法」に似るが、冠帽部の上下2個のうち下孔の位置に頂辺板の孔が重なる点が異なる。頂辺板上半部の内面には粗い織物(麻?)、外面には細かい織物(絹?)が付着する。

冑の本体は、鉄製か鉄地金銅張製の地板を使う。頂辺板の下半部外面に地板の痕跡(剥離した鉄板片)、内面にはそれを綴じ付けた横位の紐(革製?)が残る。

冑地板の下に頂辺板、その下に冠帽を重ねる冠帽付冑は、第5節で述べるように、第4図8と同じ一群に含まれる。冑部分を金銅装にする冠帽付冑は、「伝扶余出土」とされる韓南大学校所蔵の方形板革綴冑がある(国立中央博物館1999)。

Ⅲ 伝連山里出土鉄製冠帽の観察(第1図2)

小倉コレクションの伝韓国慶尚南道東莱郡連山里出土鉄製冠帽(東京国立博物館1982; 穴



第1図 韓国 伝昌寧出土冠帽付冑·伝連山里出土鉄製冠帽 (S=1/3)

沢・馬目1975, pp. 3, 12-13) も、鉄製冠帽付冑の冠帽部分と推定する。出土伝承地は、現在の 釜山市東莱區蓮山洞古墳群に相当する(宋1993, p. 195)。

左右2枚の鉄板を合わせて上縁に鉄板被覆輪をつける。大半の覆輪は脱落しているのに、左右の地板はよく密着しているので、鍛接しているのかもしれない。長径15.0×短径11.0×高9.8cm。

この鉄製冠帽も、全体を鉄で作るので、冠帽付冑の可能性がある(宋1993, p. 109; 沈奉謹他1992, p. 261)。冠帽の外面下縁には孔列に沿って革痕跡が着くが、覆輪の痕と考えるには、内面側にはないことが不自然である。あるいは革製の頂辺板の痕跡かもしれない。下縁の孔列のさらに下位には左右両板に4孔ずつがあるが(短側面図参照)、立飾りなどを取り付けた孔かどうかはよくわからない。側面形(下縁中央を上方へ抉り込まない形)や、下縁の孔列は、陜川磻溪堤가A号墳の冠帽付冑(第4図8, 國立晋州博1987)の冠帽部と類似する。磻溪堤가A号墳例は、冠帽(第3図6)を下縁の孔列で冑の頂辺板(第3図7)に取り付けるようである。

「鉄製冠帽」は、韓国慶尚南道の昌寧校洞3号墳に類例がある(沈奉謹他1992, p.157)。ただし、校洞3号墳例では下縁の孔列が不明である(第3図14)。

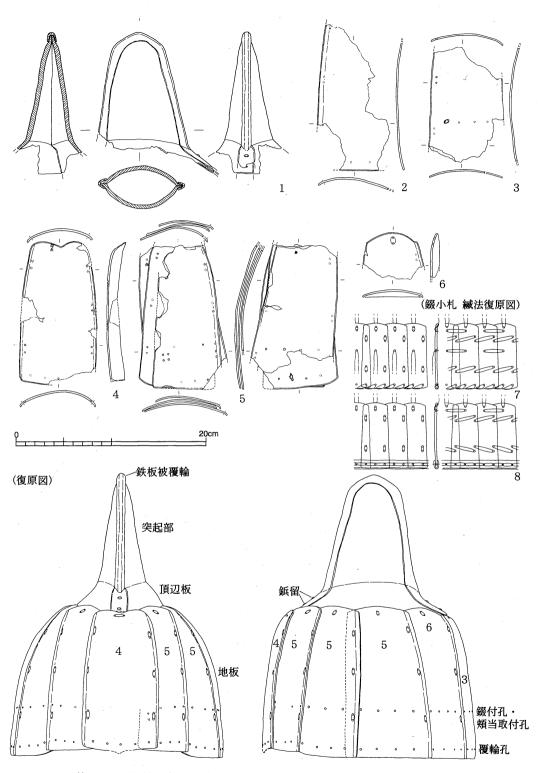
Ⅳ 渕の上1号墳出土突起付冑の再調査(第2図)

福島県郡山市所在の円墳(径20m・横穴式石室・6世紀末~7世紀初)から出土した(渡辺他1971)。

この冑は、縦長板革綴(竪矧板革綴)突起付冑である。突起部(第2図1)の鉄板被覆輪の端部は鋲留するが、地板(2~6)は革紐で綴じる。前稿ではこの冑を鋲留冑と推定したが、訂正する(内山1992, p.149)。これが竪矧板革綴の突起付冑であることを穴沢・馬目両氏(1986, p.224)は正しく指摘していた。前回の遺物調査時には所在を確認できなかった地板部分を今回調査し、両氏の観察が正しいことを確認した。ここで再調査の結果を報告する。

破片の部位と数量から見て地板は最低8枚分以上あり、本来は10枚構成と考える。一般的な 冑の大きさ(径20cm強)と、地板一枚がこの冑に占める幅(5.8~7.8cm)と、地板がふつう偶 数(正面・背面板各1枚+左半・右半に同数ずつ)であることから推定した。

左右両側縁または一側縁に、弱い稜を持って裏面側へ打ち曲げる加工をしている。横方向に綴じて重ねる上位地板の側縁を打ち曲げて下位地板になじませたものだろう。両側縁を曲げる4は冑の正面、右側縁を曲げるもの(5の銹着する3枚と6)は冑の左半部(着用者からみて左側)、左側縁を曲げる2は冑の右半部、両側縁とも曲げない3は冑の背面の地板になる。これとは別に、地板の上縁と左右側縁の裏面端部にはキメダシ加工を持つ。正面板(4)の下縁



第2図 縦長板(竪矧板)革綴突起付冑 福島県渕の上1号墳(S=1/4) (郡山市教育委員会蔵,郡山市埋蔵文化財調査事業団保管,筆者実測)

に額の中央部分の突出があるかどうかは破損して不明。復原図(第2図下段)には突出部を推 定して破線で記入した。

横綴孔は両側縁に2孔1組×3段。5の最上面に見える1枚は左下段の綴孔を内側に寄せて開けなおしたらしい。左の1枚目の地板(5)の下部を正面の地板(4)に引き寄せて、冑の前面下縁に眉形の抉り込みを作るための処置と考える(復原正面図の破線)。地板の下縁に覆輪孔、正面板以外の地板下位に錣付孔と頬当取付孔を持つ。内面の革紐痕は観察できない。銹が多く、X線写真も未撮影なので、痕跡だけ見える孔(破線)や推定による孔(点線)は、図の表現を区別してある。

4と6は地板の上部が残る。4の上部中央と6の上部右端にある切り込みは、突起部の覆輪を避けるための加工と推定した(復原図参照)。頂辺板に結ぶ綴孔は、4が横位2孔?、6が縦位2孔である。外面の革紐痕跡から見て、頂辺板の上に地板を載せて綴じるので、「頂辺板下重ね」に該当する(第4図下段)。内面の革紐痕は観察できない。

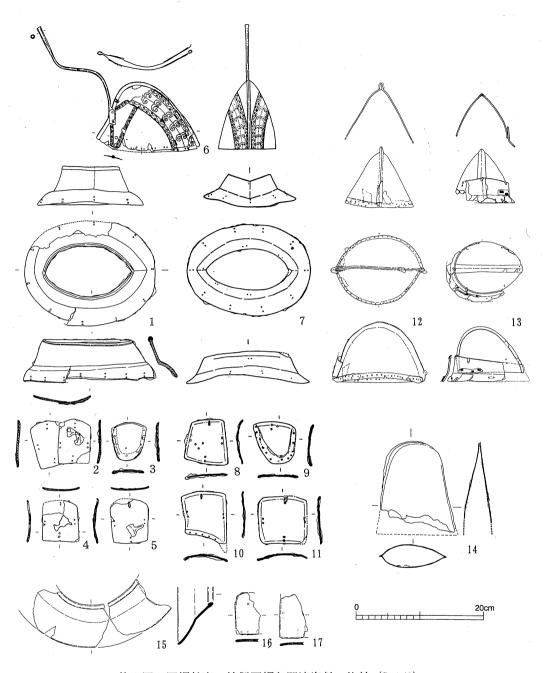
頂辺板は突起部と一体に作る(1)。冠帽付冑は頂辺板と冠帽部が別造りだが(第3図)、突起付冑は頂辺板と突起を一体造りにする(第4図6・9)。頂辺板を地板に綴じ合わせるための綴孔部は欠損している。

錣小札(第2図7・8)は前稿で説明したとおりである(内山1992, pp. 149-150)。頬当の 状況は不明で、壊れて小札残片になってしまったのかもしれない。

V 論議

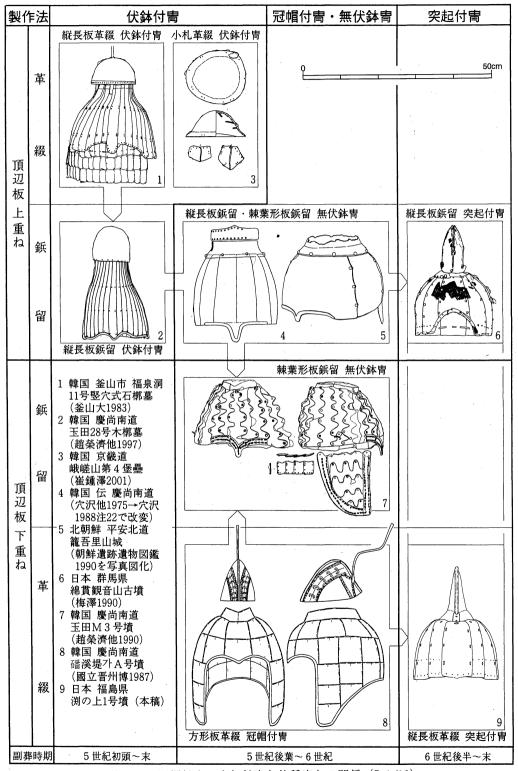
伝昌寧・伝連山里出土例 伝昌寧例の冠帽部と頂辺板は鉄地金銅張製である。金銅製の冠帽に鉄板を入れて冑の一部とし、鉄製冑の少なくとも頂辺板には金銅板を被せて装飾品の性格を備える。また、冠帽部を冑の頂辺板に紐で綴じて固定・一体化するので、取り外して個別に使うことができない。冠帽を被る場面では必ず冑(おそらく甲も)を着用するという状況は、社会的・政治的地位が軍事的職能または職掌と切り離せないことを意味する(内山1992, p.160)。軍事的官僚の身分表示機能を持つ冑なのだろう。冑の頂上部に冠帽形の銅製飾を載せる例は成都東北郊30号前漢墓(四川省1958, p.24)にもあり、北燕の推定馮素弗墓(黎1973)でも鉄製冑と冠が組み合うという(孫1995, p.317)。日本列島の眉庇付冑にも同様の例がある。

冠帽を冑に綴じて固定したり(伝昌寧例)、本来は金・銀・金銅や有機質であるはずの冠帽部を鉄製(伝連山里例・昌寧校洞3号墳例)や鉄地金銅張製(伝昌寧例)にすることは、渕の上1号墳例のように冠帽部と冑本体をすべて鉄で一体に作る突起付冑が成立する過程を示す。頂部が小型化・鉄製化した冠帽付冑(第3図12,13)が大型品(第3図1,6,7;5世紀後葉~6世紀初頭)よりも遅れて出現すると考えたいところだが、5世紀中葉にすでに鉄製冠帽



第3図 冠帽付冑・鉄製冠帽と関連資料の比較(S=1/6)

- 1~5 韓国 慶尚南道陜川郡 玉田M3号墳(趙榮濟他1990) 1:冑の頂辺板,2~5:冑の地板(方形板).
- 6~11 韓国 慶尚南道陝川郡 磻溪堤外A号墳 (國立晋州博物館1987)
 - 6:金銅製冠帽,7:冑の頂辺板,8~11:冑の地板(方形板).
- 12 韓国 伝 慶尚南道東莱郡連山里 (現釜山市東莱區蓮山洞) 出土 (第1図参照) 12:鉄製冠帽.
- 13 韓国 伝 慶尚南道昌寧出土 (第1図参照) 13:鉄地金銅張製冠帽付冑の冠帽部と頂辺板.
- 14 韓国 慶尚南道昌寧郡 昌寧校洞 3 号墳 (沈奉謹他1992) 14:鉄製冠帽.
- 15~17 日本 埼玉県 埼玉将軍山古墳(岡本編1997) 15: 冑の頂辺板?, 16:17: 冑の地板(方形板)?.



第4図 冠帽付冑・突起付冑と他種冑との関係 (S=1/10)

が見られるので(第3図14)、変化は単純ではない。

渕の上1号墳例 頂辺板と突起部を一体造りにする縦長板革綴突起付冑で、頂辺板が冑地板の下側に重なることを明らかにした。このことを手がかりにして、古墳時代後期の日本列島に搬入された突起付冑(第4図6,9)の系譜を探ってみよう。

朝鮮半島系冑(伏鉢付冑・無伏鉢冑・冠帽付冑・突起付冑)を第4図のように群別した。この他に頂辺板がない縦長板革綴無伏鉢冑があるが、今回は扱わない。注目した要素は次の3点である。

- 1) 頂辺板と地板との上下関係……〈頂辺板上重ね/頂辺板下重ね〉1~3の伏鉢も地板の上に載るので、「頂辺板上重ね」に含める。
- 2) 地板の連接法……〈革綴/鋲留〉
- 3) 地板の形……〈方形板または小札/縦長板/棘葉形板(棘葉形縦長板)〉

頂辺板が上重ねの縦長板鋲留冑(第4図4,5,6)と、頂辺板が下重ねの方形板革綴または縦長板革綴冑(第4図8,9と第3図)とが主な2群である。両群の出土地はやや異なる。

「頂辺板上重ね」は高句麗(第4図3,5)~新羅(慶州金冠塚)~伽耶(1,2,4)~倭 (6)で出土し、鋲留冑が目立つ(2,4,5,6)。上重ねの伏鉢または頂辺板の外周が張 出す3,4,5は、5世紀後葉以降の高句麗系かもしれない。

「頂辺板下重ね」は百済(伝扶余出土)~伽耶(第4図7,8)~倭(9)で出土し、平面()形の冠帽か突起を載せる革綴冑が目立つ(第4図8,9)。8の地板部は高句麗の3とも関わるが、頂辺板を下重ねにして冠帽を付けることは伽耶で盛行する(第3図)。8の冠帽部は全羅南道新村里9号墳乙棺・全羅北道益山笠店里1号墳・熊本県江田船山古墳の冠や帽と同一系譜で(申大坤1997, p.36; 咸舜燮1997, pp.86-87)、湖南地域(百済南部か馬韓・慕韓)~伽耶(西部伽耶)系とされる(毛利光1995, p.94; 申大坤1997; 咸舜燮1997, pp.96-98; 東2000, pp.3-4)。

 $6 \cdot 7 \cdot 9$ には両群の要素が一部入り込む。8の冠帽が9の突起になるならば、6の突起も8に由来するか、または祖型の有機質頂上飾が鋲留冑(4,5,7)の中にもあるのかもしれない。鋲留冑(2,4~7)のうち7だけが頂辺板を地板の下に重ね、頂部孔も()形なので、7の系譜・性格・頂上飾の種類などは4・5だけでなく8とも関わる。9の地板(縦長板革綴)は縦長板革綴無伏鉢冑から採用した可能性があるが、8の地板2~3段分を結合して縦に長くしたと考えるのも一案である。

日本列島の後期古墳から出土する外来系冑のほとんどは朝鮮半島からの搬入品と考えられる。 渡来系工人が外来系甲冑(眉庇付冑・襟状頸甲・小札甲)を倭で製作する古墳時代中期とは異 なる。6世紀代の朝鮮半島では甲冑をほとんど副葬しないので実態が不明瞭だが、日本に搬入された例から故地の状況を検討できる。突起付冑と、今回は検討していない縦長板革綴無伏鉢冑(静岡県甑塚古墳・滋賀県宮山1号墳・福島県勿来金冠塚古墳)が日本の後期古墳に見られ、今のところ伏鉢付冑がない。当時倭と交渉を持った地域の状況を反映しているのだろう。

「朝鮮半島系冑」として一括している現状からさらに進んで、三国時代の各地域における各系統の生産・使用状況を追究し、古墳時代後期の日本列島にこれらの冑をもたらした交渉関係を明らかにすることが今後の課題である。

謝辞

測の上1号墳出土冑の地板部分が現存することをお教えいただき、また、調査する機会をいただいた押山雄三・日塔とも子両氏と郡山市教育委員会・郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団、小倉コレクションの遺物調査の御配慮をいただいた白井克也氏・東京国立博物館、御教示をいただいた穴沢咊光・太田博之・塚田良道・津野仁・馬目順一・柳沼賢治の諸氏に、明記してお礼を申し上げます。

誀

(1) 太田博之氏の御教示による。

引用・参考文献

※翻訳のある文献も、原文の使用言語で配列した。

[日本文] (五十音順)

東 潮 2000「倭と栄山江流域」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集 古代学協会四国支部 徳島 pp. 1-16.

穴沢咊光・馬目順一 1975「南部朝鮮出土の鉄製鋲留甲冑」『朝鮮学報』76 朝鮮学会 天理 $pp.\,1-34$.

穴沢咊光・馬目順一 1986「福島県の古墳と横穴」 『福島の研究』第1巻 地質考古編 清文堂 大阪 pp. 200-248.

穴沢咊光 1988「『蒙古鉢形』冑と四〜七世紀の軍事技術」『考古学叢考』中巻 吉川弘文館 東京 pp. 725-774.

内山敏行 1992「古墳時代後期の朝鮮半島系冑」『研究紀要』 1 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文 化財センター 国分寺(栃木県下都賀郡) pp. 143-165.

梅澤重昭 1990「観音山古墳の発掘調査」『藤ノ木古墳と東国の古墳文化』群馬県立歴史博物館 高崎 pp.58-80.

岡本健一編 1997 『将軍山古墳 史跡埼玉古墳群整備事業報告書 確認調査編・付編』埼玉県教育委員会 浦和 pp. 126-127.

京都大学総合博物館編 1997『王者の武装』京都 pp. 100-105.

郡山市編 1973『郡山市史』第8巻 資料(上)郡山 口絵14, 図録265-269, p.10.

小林広和・里村晃一編 1979『甲斐茶塚古墳』風土記の丘埋蔵文化財調査報告書第1集 山梨県教育委員会 甲府 pp. 25, 28, 29.

清水和明・高橋 工 1998「古墳時代の外来系甲冑資料について」『大阪市文化財協会 研究紀要』1 大阪 pp. 33-50.

末木 健・今福利恵・大塚初重 1994『古墳時代の甲冑』第12回特別展図録 山梨県立考古博物館 中道 (山梨県東八代郡) pp. 35-36.

高橋 エ 1995「東アジアにおける甲冑の系統と日本」『日本考古学』2 東京 pp.139-160.

東京国立博物館 1982『寄贈 小倉コレクション目録』東京 pp. 55, 204.

濱田青陵 1932『慶州の金冠塚』岡書院 東京 図版第41.

朴天秀 1998「四、五世紀における日韓交渉の考古学的再検討 第四章 考古学から見た古代の韓・日交 渉」『青丘学術論集』12 韓国文化研究振興財団 東京 pp. 77-122.

樋口隆康·金関恕·高橋克壽·菱田哲郎 1993『宮山1号墳調査報告書』野洲町教育委員会(滋賀県野洲郡) pp. 27-29, 38, 42, 49-53.

毛利光俊彦 1995「日本古代の冠―古墳出土冠の系譜―」奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊 行会編『文化財論叢』 I 同朋舎 京都 pp. 65-129.

渡辺征一・田中正能・古川猛・金関佳生 1971『福島県郡山市安積町渕の上遺跡発掘調査概報』東北地方 建設局福島工事事務所・福島県郡山市教育委員会

〔韓国・朝鮮文〕 (カナダラ順)

國立中央博物館編 1999『特別展 百濟』ソウル p. 116.

國立晋州博物館編 1987『陝川磻溪堤古墳群』國立晋州博物館遺蹟調査報告書第2冊・陝川ダム水没地区 発掘調査報告1 慶尚南道 pp. 48, 54, 59, 242.

金斗喆 1991「第2部 伽耶의遺蹟」『伽耶 特別展』國立中央博物館 ソウル pp. 44, 76, 77.

釜山大學校博物館 1982『東莱福泉洞古墳群 I 圖面·圖版』釜山大學校博物館遺蹟調査報告第五輯 圖 面68. 圖版86-96.

宋桂鉉 1993「韓國出土甲冑의變遷——伽耶出土의甲冑를中心으로——」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』第 I 分冊 埋蔵文化財研究会第33回研究集会実行委員会 宮崎 pp. 93-201.

宋桂鉉 1995「伽耶甲冑様相의變化」『伽耶古墳의編年研究Ⅲ 甲冑斗馬具』第4回嶺南考古學会學術發表 会發表要旨 釜山 pp. 1-18.

宋桂鉉 2000「討論要旨」忠南大學校百濟研究所編『百濟史上의戦争』百濟研究叢書第7輯 書景文化社 ソウル pp. 341-343.

申敬澈 1989「伽耶의武具斗馬具」『國史館論叢』7 國史編纂委員會(竹谷俊夫訳 1993「伽耶の武具と馬具」『古代学評論』3 古代を考える会 大阪 pp.43-81.)

申敬澈 2000「百濟의甲冑에對하여」忠南大學校百濟研究所編『百濟史上의戦争』百濟研究叢書第7輯

書景文化社 ソウル pp. 323-339.

申大坤 1997「羅州新村里出土冠·冠帽一考」『古代研究』 5 古代研究會 公州 pp. 5-49.

沈奉謹・朴廣春・李東注・辛勇旻・高久健二 1992『昌寧校洞古墳群』古蹟調査報告第21冊 東亜大學校 博物館 釜山 pp. 157, 166, 261.

《朝鮮遺跡遺物図鑑》編纂委員会 1990『朝鮮遺跡遺物図鑑』 2 高句麗編 2 平壌 p.241.

趙榮濟·朴升圭 1990『陝川玉田古墳群』Ⅱ M3號墳 慶尚大學校博物館調査報告第6輯 晋州 pp.26-32,216,218-219.

趙榮濟 1995「伽耶甲冑様相의變化에對하에」『伽耶古墳의編年研究Ⅲ 甲冑와馬具』第4回嶺南考古學会 學術發表会發表要旨 釜山 pp. 19-20.

趙榮濟·柳昌煥·李瓊子 1997『陝川玉田古墳群』 VI 23·28號墳 慶尚大學校博物館研究叢書第16輯 晋州 pp. 104, 113-114, 169, 245-247.

曹永鉉 1995「伽耶甲冑様相의變化에對한質의內容」『伽耶古墳의編年研究Ⅲ 甲冑와馬具』第4回嶺南考 古學会學術發表会發表要旨 釜山 pp. 21-24.

崔鍾澤 2000 『特別展 高句麗 漢江流域의高句麗要塞』서울大學校博物館 ソウル pp. 108, 111-112.

崔鍾澤 2001 $\lceil 5 \sim 6$ 世紀高句麗武器斗馬具」『第 2 回 古代武器研究会』滋賀県立大学・古代武器研究会 彦根 p. 19.

咸舜燮 1997「小倉Collection金製帯冠의製作技法과ユ系統」『古代研究』5 古代研究會 公州 pp.69-102.

[中国文] (ピン音順)

黎瑤渤 1973「遼寧北票県西官菅子北燕馮素弗墓」『文物』1973年第3期 北京 pp. 2-28.

四川省文物管理委員会 1958「成都東北郊西漢墓葬発掘簡報」『考古通訊』1958年第2期 北京 pp. 14-31.

孫守道(宮本一夫訳) 1995「三燕時代と古墳時代の騎馬文化の比較研究」秋山進午編『東北アジアの考古 学研究』同朋舎出版 京都 pp. 314-322.